札幌学院大学図書館報

書林

第88号

2015年10月5日　発行

巻頭言……1
私の薦めるこの1冊……2～4
from Library……5
自著紹介……6～9
Welcome to SGU Library……10～11
編集後記……12

１０分間読書から始めよう

図書館長　皆川　雅章

読書習慣を持つきっかけは、人それぞれだと思います。私の場合、１０代後半に書店の店頭を何気なくながめていて、目にとまった北杜夫（きたもりお）さんの作品を読み始めたことでした。特に作者の旧制高等学校時代の生活を話題にした「どくとるマンボウ青春記」は今でも強く印象に残っており、登場人物達を通じて描かれる「バンカラ」で自由奔放な行動に惹かれて一気に読み終えた記憶があります。この作者の軽妙でユーモアにあふれた文体も大きな魅力でした。

これ以降は、乱読気味でしたが、海外の旅行・滞在記録、海外文化を紹介する本を読むのが好きでした。そのような本を読むことによって、自分が行ったことのない場所、自分が出会ったことのない人々、自分が接したことのない文化等を頭の中に描いて楽しむことができました。その当時、海外旅行が一般的ではなかったので、読書によって疑似体験をしていたことになります。それから、思想に関する本を読むことによって、長い歴史の中で、これまで人々が蓄積してきた、物の見方、考え方を知ることができたように思います。あるときは共感を抱き、あるときは疑問を持ちつつ読むことによって、擬似的な対話を通じた思考の訓練を行っていたと言えるかもしれません。

このような読書おいて、共通して言える事は、生活であれ、文化であれ、思想であれ、自分とは異質なものに対する理解を深めることができるということです。もちろん、実際に直接体験し、見聞きするということの重要性を否定するものではありません。しかしそれには限界があります。社会におけるトラブルの原因として、互いに相手についての知識を持ち合わせていないことが原因である場合があります。いきなりリアルの世界で衝突する前に、読書によってバーチャルの世界でシミュレーションをしておきましょう。読書は自分の経験や思考の幅を広げるとともに、そのような社会的な行動を考える上でも役立つのではないかと思います。

最後に、図書館長として学生諸君に一言。１日に１０分間の読書を１年間続けるとどうなるでしょうか？合計時間は３６５０分で、これは２日と１２時間５０分になります。連続して休み無く２日半も読み続けることは現実的には無理ですが、１０分であれば、通学の途中でも、授業の合間でも割くことはできます。みなさんが社会に出ると、この毎日の積み重ねが出来るかどうかで将来が大きく変わってきます。本を新聞に置き換えてもよいでしょう。最初は手軽な新書版で良いので、まずは手に取って読んでみましょう。本のタイトルを絞り込めないときには、図書館職員の方に関心のある分野を伝えて、尋ねてみましょう。あなたのための１冊が見つかると思います。

※ 皆川館長は、今年度〔2015（平成27）年４月〕より、新図書館長として就任されています。
ご挨拶を兼ねて、巻頭言にお寄せいただきました。

自著紹介

佐々木　洋（名誉教授）

『ウォルマートはなぜ、世界最強企業になれたのか：グローバル企業の前衛』

ネルソン・リクテンスタイン　著
佐々木　洋　訳
〔 金曜日　2014 年 〕

「ピッ」と唄うウォルマート商法

― 拙訳『ウォルマートはなぜ、世界最強企業になれたのか』によせて ―

「マクドナルド化」と「ウォルマート化」

イオンでも生協でもコンビニでも、レジでスキャナーが「ピッ」と唄う。

「ピッ」と唄うと、いつ、どこで、何のどの品が、いくつ売れたか、ディーラーもメーカーもリアルタイムで掌握でき、在庫補充や、売れ筋の開発にも、増産にも役だつ。

このpoint of sale；POS＝販売時点情報管理の基礎となる、バーコード革命を先駆け商法の一つとして、アメリカ深南部アーカンソー州北西隅の片田舎に誕生した安売りチェーンが、やがて世界断トツのマンモス・スーパーにのしあがったのがウォルマート社である。

日本では落ち目だが、北京でもモスクワでもマクドナルドは人気がある。ファストフードが普及する今の世相に、「マクドナルド化」という切り口で迫ろうとする論客がいた反面、レジが「ピッ」と唄うリズムと関係なしには、ひとりも暮らしていけない現代を、「ウォルマート化」した社会だ、とは誰も言わない。あまりにも日常化していて、あまりにも当たり前になっているこのリズムの非凡さに、誰もがほとんど気を留めないからであろう。

日本の西友は米ウォルマート社の百パーセント子会社である。今の西友はパッとしない。西友のシェアも高くないため、日本人消費者は、ウォルマートと言ってもピンとこない。だが、あらゆるスーパー、あらゆるコンビニが、実はウォルマート商法に依拠している。

そして、ピッという唄は聞こえない、今流行の通販ショッピングも・・・。

ことの重みと奥ふかさを知らされたのが、リーマンショック翌年の 2009 年だった。

本学経済学部『外国書講読』履修者と米国視察旅行

筆者は現職最後の 2010 年度の担当科目に『外国書講読』を加えてもらった。その前年からアマゾンその他のネット予約案内に目を凝らし、The Retail Revolution＝小売革命の刊行予告を見つけた。そして本書が、優れた学術専門書であるのはもちろん、大学院生も含めた学生向けテキストにも使えることを心待ちにしていた。まさに図星の書物だった。

なぜなら、The Retail Revolution が、ウォルマート社に代表される米欧の郊外型巨大小売店舗（巨大スーパーのこと）チェーンが、安売り商法の圧倒的販売力を武器として、名だたるメーカーの風上にたち、さらには、世界の工場＝中国の巨大な生産力を、自社ブランドの消費財を無尽蔵に提供する下請け工場群として統合しつつあるという、現在進行形のグローバリゼーションのダイナミズムを、類書にない鮮やかさで活写しているからだ。

ウォルマートが安い理由は三つある。まず、従業員の 7 割をしめるパートさんが、終業後のアルバイトなしに家族を養えないほどペイが安い。第二は、販売品のゆうに過半を生産する中国南部の農民工（内陸からの出稼ぎ農民）の低賃金だ（昨今はヴェトナム産やバングラデシュ産もある）。第三が、IC タグのバーコード革命やコンテナ革命を真っ先に採用し、衛星通信を駆使するジャストインタイムの海陸一貫ロジスティックスであり、その物流規模の巨大さと高速性ゆえに、中国南部→米国内陸部の輸送コストを全く苦にしない。

筆者は『外国書講読』履修者有志と一緒に、ロサンゼルス在住のわがゼミ卒業生（中国人留学生夫妻）の厚意で、中国出港の大型コンテナ船が荷役するロサンゼルス＝ロングビーチ複合港や、ウォルマート店舗とそのライバル店舗などを視察する機会にも恵まれた。

流通システムの専門書、ビジネス書、歴史書、グローバル経済書の傑作

本書は、ウォルマート社の米国市場席巻と、同社主導による米中経済の相互依存、世界最大企業としてのウォルマートの海外攻勢（西友を含む）を、創業者サム・ウォルトンと歴代経営トップの経営戦略の継承・変遷にそくして述べている。しかし、本書は、ただ特定の一企業の成立史と海外進出をとりあげたものではない。かつてペンシルヴァニア鉄道やＵＳスティール、あるいはフォード社やＧＭ社を論ずることが、米国ないしその時代の世界を代表する企業システムについて議論したのとまったく同じ意義をもっている。

サムは、気さくで、そのうえ、なかなかの、カリスマ的人物であったが、最大の特技は、平素からライバルの優れた手法を貪欲に学ぶ才覚だった。興味深いことに、わが国の市場経済変貌のうえで一世を風靡したダイエーの故・中内功のもっとも学んだ同時代人がサム・ウォルトンだった。イオンの岡田卓也名誉会長もウォルトンは気になる存在だった。

逆に、バーコード革命やロジスティックス展開、中国南部の下請け工場地帯化などでは、米国内外のライバル各社が、事実上こぞってウォルマート商法を研究・模倣してきた。

本書『ウォルマートはなぜ、世界最強企業になれたのか』の原題 The Retail Revolution＝小売革命は、21世紀転換期に経済のグローバル化を媒介したのが、ウォルマートを前衛とする小売り革命（バーコード革命、ロジスティックス革命、中国南部の下請け工業基地化など）であったとの、ネルソン・リクテンスタインの世界観・歴史観を示唆している。

本書はそういう意味で、個別企業をこえた、業界全体、さらには特定の業界を越えた、「時代の書」という性格をもっていることを確認しながら訳業をすすめてきた。

本書は、物流業の専門書、ビジネス書、歴史書、グローバル経済書の傑作としてなど、いろいろの読み方が出来るだろう。経済・経営の学生諸君には、グローバル経済の浮沈と帰趨を、いまなお大きく左右する米・中の相互依存関係の実相と、それを媒介するマンモス・スーパーの活躍ぶりを実証的に説く、現代世界経済の歴史書として読んでほしい。

翻訳で大切なこと　原著者との交流

本書は筆者の３度目の英文原著からの邦訳書である。自分の語学力の限界をさらすようだが、原著者が、本当に何を言いたいのか、どうも分かりかねるパラグラフや用語法に出くわす場合があり、困ってしまう。原著者の単純な誤植に気づくこともある。

そういう場合、筆者は、原著者に照会の手紙を書き（最近はＥメール）、教えを乞うてきた。今回も、より正確を期したいと、５箇所ほど照会してみた。著者ネルソン・リクテンスタイン（カルフォルニア州立大学サンタバーバラ校経済史講座教授）は、即刻、回答をよせ、該当箇所について筆者個人の改善試案を求めてきた。教授と相談の結果、日本語版では、表現をより厳密に是正した箇所がある（本文中に注記してある）。

翻訳書を読んでいて、どうも分かりづらいとか、どうも筋が通らないと感ずる場合が往々にある。私の経験則では、適切といえない訳文に原因がある場合も少なくない。

そうした意見交換をへて、昨年秋、邦訳書の刊行を機に、ロサンゼルス近郊のサンタバーバラで、原著者と会食することになっていた。ところが、先のゼミ卒業生夫妻と再会する段取りも決まり、フライトの予約も済んで旅立つばかりのタイミングに、ここ数年の過労からか、突然発症し、生まれてはじめて、短期ながら入院する憂き目にあった。

脳神経科担当医から「米国行きは厳禁」といわれ、旅は１年お預けとなった。だが、自分がウォルマートと今ひとつ浅からぬ「縁」で結ばれる体験もした。最初の外泊が許され、自宅でたまったメールをチェックしようとＰＣに向った矢先、もののはずみで転倒、頭部をまもろうと、腕に傷を負った。近くの救急指定病院に行き、順番を待っていると看護士さんが、当院では診察できないと告げた。筆者の左手首に白黒バーコードのタグが巻いてあると分かったからだ。受付に戻るとスキャナーが「ピッ」と反応、救急担当医が、患者は 1.5ｋｍほど北の脳外科総合病院に入院の身と確認、急患をすかさず入院先の整形外科に送り届ける手はずが整った。サンタバーバラでの会話が弾むのは間違いなかろう。

【 図書館所蔵　１層書架：和書 673.8/LIC 】